田利長の富山養老附士帳には、宛行廿五石から十俵に至る餌指が十三人も載せられてゐる。國事昌披問答に、金澤の餌指は利常の時から綱紀の時まで、三人扶持・二十俵を賜はり、一刀を帶し、岸藤右衞門などは足輕の類で苗字を有したが、言上紙面のみには苗字を除いた。然るに彼等は漸次死絶えて、その代りを召抱へられることもなく、子弟を御雇として、雀六羽を銀一匁で買上げ、代銀を年切で下附せられ、一刀を帶する浪人でゐた。享保九年改めて餌指を召抱へ、宛行を三人扶持・十五俵とし、役烏一ヶ年三千羽と定め、小頭は三人扶持・二十俵・役烏二千羽とし、爾後足輕一列の待遇となつた。

ヱサシマチ　餌指町　金澤の舊町名。或は淺野餌指町ともいうた。元祿十一年の文書には御餌指町と書いてある。藩政中鷹方餌指等の組地で、初め古餌指町に居たのが轉じたのであるといふ。今の淺野町の一部であらう。

ヱネゴホリ　ゑね郡　江沼郡を中古の文書にゑね郡、又はゑゐの郡、又はよゐ郡、又は米郡と書いたものがある。上古のえぬ郡の訓が訛りながら此頃まで傳はつてゐたものと思はれる。黄薇書簡集所載小早川秀秋より龍野孫兵衞への宛行狀には久ゐ郡横北村とあるが、これはゑゐ郡を誤寫したものである。

ヱボシイハ　烏帽子岩　能美郡岩上の西南四〇〇米、西俣川に沿ふ道路に在る。『緩帶編に、『烏帽子岩、岩上村にあり。高さ十五間程にて、形烏帽子に似たり。古は此岩を神と崇め、村名の文字を岩神と書きしよし。』と記する。

ヱボシオヤ　烏帽子親　藩政の頃能登では、男子十七歳に達する時、その信頼する人に請うて烏帽子親とし、餅肴等を贈り、親からは烏帽子子に袴を與へ、日を期して前髪を去り幼名を改めしめた。卽ち元服の式である。

ヱボシジマ　烏帽子島　↓コシキジマ　甑島(鳳至)。

ヱボシヤマ　烏帽子山　石川郡奥池部落の西北に在る山。奥池から山頂へ二粁餘。高さ圖上測定一一四二米、地質第三紀層。

ヲ

ヲイケ　小池　河北郡五ヶ庄に屬する部落。

ヲイケ　小池　鳳至郡大屋庄に屬する部落。

ヲイケガハラ　小池川原　鹿島郡矢田郷に屬する部落。

ヲイシ　小石　鳳至郡櫛比庄に屬する部落。

ヲイセ　小伊勢　鳳至郡大屋庄に屬する部落。能登名跡志に、『小伊勢村、氏神廣田大明神にて、祭禮毎年九月十五日也。昔は伊勢の内外の御神を勸請して諸人歩を運ぶ故、本伊勢の名ある由。』又『今も此村に御館などゝてあり。是は伊勢の御師の館跡ともいへり。』とある。

ヲウラ　小浦　羽咋郡堀松庄に屬する部落。

ヲウラ　小浦　鹿島郡能登島庄に屬する部落。但しその民家は慶安中から斷絶して今存せぬ。

ヲウラ　小浦　珠洲郡木郎郷に屬する部落。能登名跡志に、『眞脇より小浦村へ十三町あり。磯に義經の烏帽子岩というて在り。又同鼓堂というてあり。何れにも當國には義經の舊跡所々にあり。所にいへる故記す也。此宮は王氏の宮というて、よき社地也。御神体阿彌陀如來の木像の由。又岡山に崎山というてあり。開き地にてよき田地あり。百姓彦兵衞というてあり。此者の先祖開きし也。』と記する。

ヲウラカツモリ　小浦一守　通稱石見守。父は三善石見守光康。一守は祖先以來越中氷見庄池田村小浦山に築堡するを以て小浦を氏とした。天正四年上杉謙信に屬し、六年謙信の歿後佐々成政に臣事したが。十三年成政の新川郡に去つた時、一守も小浦堡を棄て、十五年成政に肥後に隨ひ、十六年その自盡を命ぜられた後は堀秀治の家中に寓し、文祿二年能登羽咋郡飯山に移り、剃髪して松原齊安と稱し、元和元年二月六十九歳を以て歿した。

ヲウラシヨウエン　小浦松園　通稱加賀屋吉左衞門。羽咋郡小浦に住し、白井華陽に學んで畫を描いた。嘉永四年十月廿二日六十一歳で歿。

ヲカ　岡　江沼郡那谷谷に屬する部落。續日本紀天平寶字六年四月に、『壬申勅越前國江沼郡山背郷戸五十烟施二入岡寺一。』とあるから、大和國岡寺領になつてゐたのは此所であらうといふ說もある。

ヲカ　岡　鹿島郡北三郷之内中山郷に屬する部落。

ヲカ　岡　鹿島郡中島の内の小字。

ヲガキ　小垣　鳳至郡諸橋郷に屬する部落。永祿五年の鵜川天滿宮寶殿修造記に小垣村の名が見える。

ヲカザキテイ　岡崎邸　京都に在つた加賀藩邸。慶應の頃加賀藩はその大兵を京に留める必要があつたので、洛外岡崎村に四萬三千三十八坪の地を借りて假舍を起し、三年八月六日之を我が邸地として與へられんことを幕府に求めてその同意を得、明治元年十一月廿六日建築が成つた。二年正月前田慶寧の上京した時宿泊したのもこの邸である。

ヲガサハラギヨウブ　小笠原刑部　前田利常の臣で推歩の術に精しかつた。大坂冬陣に利常、城上に氣の立つを見て刑部に占はせた所、龍虎の氣で、やがて和談となるであらうと斷じたが、果してその通りになつた。夏の陣にも、堀の上に氣の立つを見て、山崩の氣なるが故に三日の内に落城すべきことを言ひ當てた。

ヲカジマイチノカミ　岡島市正　備中一吉の二男。越登賀三州志に、慶長五年大聖寺城攻撃に、市正は富田藏人高定と義盟し、同じく銀梨子打の冑を著て進み、藏人は眞先に鎗ヶ丸に乘入つて負傷自刎し、市正も次いで戰死した。享年十八とある。

ヲカジマカツキヨ　岡島一清　通稱圓次郎。市郎兵衞元爲の子源左衞門元直、その子藏人元盾、その子圓次郎一清である。享保九年八月父の死後、一清幼なるを以て遺知四千石の内千二百十石を嗣ぎ、十二年十月二日六歳で早世したので、跡式相續の命がなく、家遂に斷絶した。

ヲカジマカツノブ　岡島一陳　通稱市郎兵衞。一諱元陳。備中一元の三男で、家嫡となり五千石を領した。初室は前田利政の女。寺社奉行・公事場奉行・御本丸御城番に歷任し、明暦元年を以て歿。